

「神さま仏さま」

(「土曜の放課後」⑤ Frame in Box 2024年8月3日)

日本における宗教と超越者について考えるとき、日本語のこの言い回しがすべてを語っているように感じる。それはどういうことだろうか？

まず、この文言における神や仏には「実体」の感覚が乏しい。

「実体」というのは哲学的には、他の原因から来る結果としてではなく「それ自身によって存在するもの」という意味である。一神教においては、神は究極的な実体である。だから神の存在は、この世界にとっても、個人の人生にとっても、最も重大かつ切実な問題となる。さて慣習上「神の存在」というような言い方をしているが、本質的には「神＝存在」なのである。その方が分かりやすい。神がいなければこの世界に意味がなくなるから深刻なのである。時代が降ると、神の概念は特定の歴史的背景（ユダヤ教、キリスト教など）に依存する相対的なものだと感じられるようになる。その場合は「神＝存在」から「神」は消してもいい。すると「存在」だけが残る。これがニーチェであり、ハイデガーである。けれども「究極的な実体が存在しなければ世界が無意味になる」という中心の問題は何も変わらない。

それに対して「神さま仏さま」という日本語の言い回しにおいては、神仏の存在に対して同じように強い関心が向けられていない。この言葉はしばしば「カミサマホトケサマ」などと表記されたりするように、ほとんど呪文のような文句である。歴史的経緯も性質も異なる二つの超越者が併記されていながら、その間には矛盾も対立も感じられない。その意味で「神仏習合」をひとことと言っているような表現とも言えるが、神仏習合というのはたんに二つの宗教が合体したというだけのことではない。それは超越者に対する、一神教とはまったく異なった態度を意味している。一言でいうと、それは「存在」への無関心である。

神仏の存在に対する無関心とは、それらが存在しないという主張ではない。日本人に「私は無宗教だ」という人はいるが「私は無神論者だ」と言う人は少ない。無神論というのは、超越者の存在という問題に強い関心があってこそ可能だからである。つまり日本人（国籍や民族ではなく、日本文化と日本語の世界に根ざして生きる人）にとっては、超越者の存在／非存在という問題はどうでもいい。にもかかわらず、生きてこの世界のいたる所に神仏は感じられるし、尊重しなければならないことに変わりはない。そもそもこうして生きていくこと自体が神仏のおかげ（冥利）であって、それは哲学的な議論（存在論）以前のリアリティとして感じられる。

この意味では、世界の中で日本人は無宗教と言われることが多いが、本当はいちばん宗教的な人々なのかもしれない。それに対して、超越者の存在／非存在を問題にしなければならない（神の存在を「証明」しなければならない）一神教的な文化は、「冥利」のようなリアリティがもはや感じられなくなった結果として生まれるとも言える。

原因／結果という観点から別な言い方をしてみるなら、一神教的な世界においてはまず究極的な実体としての神が原因となり、この世俗的日常世界はその結果として生じてくるにすぎない。原因が変われば結果も変わるが、結果をいくら操作しても原因は変わらない。神が存在するから宇宙が存在する。それに対して日本的な宗教観においては、まず世俗的日常が存在する。強いて言えばそっちが原因である。そこから超越者が言わば結果として遡及される。だからいろんな原因（生活様式の多様性）に応じて、超越者は神だったり仏だったりいろんな姿で現れてくるが、それは

別に異常なことではない。そのことによって神仏の超越性や神聖性が損なわれるわけでもない。日本人にとって厳密な意味で「異教」というものはなく、世界中の人々が敬虔に信仰している対象は、それぞれの生活様式から帰結する神仏なのだから、みんな尊ぶべきものなのである。

以下の文章は、いわばこうした「存在なしの超越性」という主題をめぐって過去に書いたものである。

①沈黙をめぐっては、2014年に亡くなった友人の葬儀の帰りに書いた。彼は脊髄小脳変性症という治療法のない稀な病気のために、次第に運動神経が麻痺していった最後は寝たきりになり、最後の一年は会話も反応もなくなった（だから見舞いに行ってもこちらの話が聴こえているのかどうかも分からなかった）。葬儀は家族だけで行うものだったが僕は親友ということで呼んでもらい、斎場は町田だったので、帰りに駅の近くの喫茶店に入って、どうしても理屈の通らないことを書かずにはいられなくなって書いたものである。

②死ぬのはいけないことでしょうかは、コロナの期間中、ブログで学生やいろんな人たちからの質問に答える「れいわtanuki問答ポンポコ」というふざけた活動をやっていた時に書いたものである。僕にとって生や死に「意味」を求めることは、ニヒリズムであり病気であると強く感じられる。生にも死にも意味がないことは当たり前であり、そのことで人は絶望したり自殺したりすることはないとも感じる。この感覚はまだ本も読まない子供の時からずっとそうだったが、子供の時はそのことを言語的に表現できないのでいわば「沈黙」していた。

語りえないものを語る（たとえば神を画像表現する）のが、いわば芸術である。だがその場合の「語る」とは、論理的破綻なしに何らかのシンボルを実在と対応させることではない。芸術のメッセージはむしろ、そうした形式的記述が破綻し失敗する過程から発生してくる。そして重要なことは、こうした破綻や失敗にも、身体に根差した別種の普遍的論理がある（そうでなければ良い表現や拙い表現との区別ができない）ということである。ちなみに最近の学習指導要領では「文学国語」と「論理国語」とを分ける（そして後者を重視する）らしいが、文学を軽視するなという以前に、文学（芸術）と論理とを区別できるという認識自体がまったくの誤りであり、それは言語教育を破壊するニヒリズムである。文科省はどうかしている。

① 沈黙をめぐって

「沈黙」は非在のしるしではない。語られないもの、語りえないものは、だからといって「無い」わけではない。はじめから存在していないとしたら、そもそも沈黙することすらありえない。だから「沈黙」とは、むしろ何かが存在していることの証しである。ようするに、沈黙には意味があるということを言いたいのだ。そのことを（沈黙せずに）こうして書くことは、何か矛盾しているようにも思えるけれど。

沈黙とは、世界の基底的な状態のことである。けれどもここで言っている沈黙とは、語ろうと思えば語れることをあえて語らない、というような意味ではない。あるいはいかに言葉を尽くしても語りえぬがゆえに、あえて黙っている、というようなことでもない。つまり「沈黙は金」といった意味での沈黙ではないということである。

そうした、語ることをあえて控えるというような態度は、とりあえず「相対的沈黙」と呼んでおこう。それに対してここで言っているのは、いわば絶対的な沈黙である。「絶対的沈黙」は、実際

にそれが語られるか否かには、無関係である。言葉巧みあるいは無様に語られても、あるいは何も語られなくても、そうしたあらゆる語り（あるいは語りの不在）の基底に、常に横たわっているような、ひとつの状態のことである。

たとえば、何かについて話すとする。作品についてでも、人生についてでもいい。うまく話せることもあれば、話したことを後悔したり、言葉に窮して黙り込むこともある。だが、話すことの有無や巧拙とはまったく無関係に、話している人の周囲には、常に絶対的な沈黙が支配し続けている。あってもなくてもいいものではない。むしろそうした「絶対的沈黙」があることによって、すべての語り（と相対的沈黙）が可能になっている。

「語りえないものについては沈黙するしかない。」という有名な文がある。ウィトゲンシュタインがどういう意図で書き記したのかは知らないが、多くの人はこの文を「形而上学の終焉」、つまり「神さまについてああでもないこうでもないと言っても仕方ないから、もうオシマイ！」という意味で受けとった。でもよく読んでみれば、どこにも「オシマイ」なんて書いてない。ではどういう意味だろう？ ぼくには、「沈黙こそが世界の基底的条件である」と言っているようにも読める。

あるいは「神は死んだ」（ニーチェ）という有名な文がある。これも、ふつうはやっぱり「オシマイ」的に解釈されることが多い（人はドラマが、華々しいクライマックスのある物語が好きだからだ）。けれども本当にそうだろうか？ そもそも死んだ存在とは、死者とは何なのだろうか？ 死者とは、去ってしまった者、非在の者ではない。死者とは絶対的に沈黙する存在者、沈黙しつつ（今ここに）臨在する者のことである。神が死んだとは、いままで存在していた神がいなくなったという意味ではなくて、神が「沈黙しつつ臨在する者」になったという意味なのである。

生きているかぎり、私たちは語る。そもそも生きていることは、多かれ少なかれ語り続けるということと、同義である。私たちはときには沈黙することもあるけれど、それは相対的な沈黙だ。だが、そうしたせわしない語りや相対的沈黙の基底には、「絶対的沈黙」がある。この絶対的沈黙とは沈黙しつつ臨在することであり、それが死者の領分だとするならば、死者は常に生者に重なり合って存在している。私たちはいわば最初から死者なのであり、絶え間なく語ることによってそのことを隠しているだけなのだ。

人は誰でも歳をとる。あるいは若くして病に冒され、動く能力、語る自由を奪われることもある。死を待つだけの絶対的な受動性——それは一見、何か重要な能力が損なわれ、壊れてしまった悲しむべき状況にみえるけれども、そうではない。語りから退くこと、語る力を奪われることが本当は何を意味するのかというと、それは、生者に重なり合っていた死者がしだいに現れてくること、世界の基底にある絶対的沈黙が顕在化してゆくということにほかならない。それは生きるというプロセスの重要な一面なのである。

「絶対的沈黙」について語ること（つまりこの文章）が、そもそも理屈に合わないのは知っている。ならば、どうしてこんなことを書いているのか？ 広い意味での芸術活動というのは、こうした絶対的沈黙のすぐ近くにある営みであると、ずっと感じてきたからである。語りえぬものは、世界から完全に遮断されているのではなく、その近傍に何かを放射する。すべてを飲み込むブラックホールの表面で生じる「ホーキング輻射」のようなものである。あるいは、太陽そのものではなくその表面から立ち上がる炎、太陽フレアのようなものである。そうしたフレアを捉える活動が芸術である。

芸術について、ほとんどの人は語ったりしない。けれどもそれは、ほとんどの人が芸術とは無縁だということを意味するのではない。芸術は誰にとっても本質的に重要である。ほとんどの人は、ただ沈黙しているだけである。芸術の研究者や批評家は語るけれど、その語りは「絶対的沈黙」を言い当てることはない。語る少数の人も沈黙する多くの人も、絶対的な意味では、沈黙しているのである。芸術についての語りは巧みであったり、ぼくのように下手クソであったりするけれど、「絶対的沈黙」という基底的状态からすれば、まったく同じである。だから絶望的なわけではなく、むしろだからこそ、こうして語ることにわずかな希望が持てるわけである。

『ミニマ・エステティカ 2』224-225頁 2014年8月20日

② 死ぬのはいけないことなのでしょうか

【Q】死ぬのはいけないことなのでしょうか。死ぬまで生きなければならないと思っていますが、生きたいと思えない世界なのに生きることこそ正しいとされているような現在は生きづらいと思うのです。

【A】死ぬのは、自然なことです。そして自然は「善悪の彼岸」なので、いいとかいけないとかいった判断は通用しません。だから死ぬというのは、いけないことでもいいことでもなくて、ただ死ぬということ、それだけです。

人間はとかく死について、ゴチャゴチャ理屈を並べたがります。それは一方では不安があるからで、どんなに賢い人間でも、自分という存在がなくなるという状態を、ちゃんと想像することができないからです。また他方では、とりわけ（不幸にも）この世で名誉や権力や財産を蓄えてしまった人は、自分の死後それをどうすべきかということに悩むからです。そうでない人も、子供の行く末などを心配します。

だがいずれにしても、まったくの徒労です。生きている限り、死を適切に理解することはできないし、また自分の死後の世界をいくら整えようと努力しても、それは決して思い通りにはなりません。どんなに偉い人も、生きていた時に抱いた理想は、死ねばあつという間に忘れ去られていきます。

それでいいのです。そうでないと世界は続いていきません。

質問された方が、この世界を生きたいと思えないのは悲しいことです。しかしそういう生きづらさは、「生きることこそ正しいとされている現在」から生じているのです。「生きることこそ正しい」というのは、哲学用語で「ニヒリズム」と言います。それは「今すぐ死ぬのが正しい」と言っているのと同じことなのです。

生きていくにはむしろ、「いつ死ぬかもしれないし、そうなったら仕方がないが、今日はとりあえず生きる」というくらいの方の方が強いのです。生が死を抱きかかえつつ進むのが自然ですから、この方が自然に即した態度なのです。

死は生の敵ではなく、生の不可欠な一部分です。幼児や子供が大人よりも生き生きとして見えるのは、彼らが死から遠いからではなく、大人よりも死に近いからなのです。

『ミニマ・エステティカ 4』67-68頁 2020年9月4日